**№50　テーマ『激変の時代を生きる』**

**講話日2011年1月17日**

**皆さん、明けましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願いします。今日は今年最初のお話なんですけど、とにかくご承知のように全世界的な激変・激動の状態でいろいろと思わざることが多々起こってくるというのが、時代の流れなんですね。激変・激動という問題がどういうことを根拠にして出てきているのか、ということからお話をさせていただきたいと思うんです。今の世界的な激変が起こる根底には二つの大きな要因があるということが一般的に言われております。まずこれまで欧米が世界の中心であって、時代をリードしているという、指導的な役割を果たしていた。ようやくアメリカ・ヨーロッパが中心になって動くという時代が終わってしまって、これからはアジアが中心になってアジアの発展が世界を支える状態に変わった。すなわち世界文明の中心が西洋から東洋へと移動している状態にある。だけども、まだまだ西洋も力を持っておりますから、完全にアジアに移行したというわけではない。とにかくこれからはアジアがどんどん発展していって、やがてはアジアが世界をリードする状態に変わっていく。そういう大きな流れの中の過渡期にあるという状態です。これが激動というものが起こってくる外面的・外在的と言われる、外の世界における原因だということができます。もう一つの大きな原因は、理性の時代と言われた近代がようやく終末を迎えて、そして感性の時代、感性は感じるという力ですけど、感性というものは精神原理として重要な働きをする新しい時代へと変わっていく。すなわち人間の内面、精神的な原理が理性から感性へと変わっていく、ということが原因でいろんな社会問題が起こってくるというそういうことがあります。とにかく空間論的というか、外の世界の原因は、世界の中心が西洋から東洋へ移動していくということ。そこから起こってくる問題。もう一つは時間的な経過で、近代の理性の時代というのが終わって、次の新しい時代、感性の時代が始まったということ。そういう時間的な流れから出てくる大きな変動が現在の激変・激動の原因だと言えます。両面から今日の激変というものを理解していかないといけないわけであります。そういう意味では近代の理性というのは、あらゆるものを固定化していくというもの。理性によってつくられたものはなかなか変化しないということがあるから。だけど感性というのは常に変化を求める。感性というのは変化がないと退屈だという意識ですから、感性というのは変化を求める能力である。であるがゆえに激動・激変の時代の原理になる、その中心的な力になるものは感性だと言わなければならない。**

**その意味では、今は近代から次の新しい時代の過渡期にあるし、また西洋から東洋への過渡期でもある。過渡期という状況の中にありますので、その中で生きる我々においては、どういう意識、気持ちが大事なのか。それを考えてみると、時代そのものが大きく原理的に変わっていくという状況の中で我々は生きているわけですから、時代そのものから「激しく変われよ、変えろよ」という叫びが人間に投げかけられていると考えていかなければなりません。今は我々自身が激動・激変を自らつくり出していくというような、積極的な気持ちを待たないといけない時代で、何一つ今のままでいいというものはないし、過去の延長線上で未来を考えてはならない。そのことが時代認識として言えるのではないかと思います。そういうことの中で、世界文明・時代の中心が今日本の真上にあるという認識を我々は持つ必要があるのであります。これはうっかりするとすでに日本を通り越して、今の時代の中心は中国に行ってしまっているんじゃないかと。中国がGNPにおいては日本を追い越して、さらにアメリカを追い越して、世界第1位の経済大国になるということは見えています。そういう意味では、日本を通り越して中国に時代の中心は移っているので**

**はないか、と言われる方も大勢いらっしゃいます。だけどまだまだ中国は国の成長段階から言うと、中国は先進国であって先進国と言える時代の最先端の発展を導いていく、指導的な力は持っていないと言えます。中国は非常に大きな経済力を持ち始めましたけど、国民一人当たりの生産力から見てみると、中国は日本人の1/10という経済力しか持っていないというのが現実です。だけども、中国は人口が多いから一人当たりの生産力は小さくても掛け算すると、日本を抜いてしまう、あるいはアメリカを抜いてしまうという状況になってしまうんですけど。国民一人ひとりの文化状況、精神レベルというのは、まだまだ低いという風に言うことができるわけであります。その意味では、中国が世界の中心となって世界の指導者となって、全人類から尊敬され信頼されるという指導国家になっていくには、まだまだ100年200年という長い年月が必要だという風に言うことができるわけであります。**

**特に中国の場合には、共産主義というイデオロギーが社会的・政治的に存在しますので、理性的につくられた考え方、イデオロギーというものによって国家が成り立っているというのは近代国家の姿ですから、次の新しい時代というものを指導していくような力は中国にはないわけです。中国が本当に指導者としての役割を果たすことになるためには、まずは共産主義ということを脱却して、抜け出していって、そして新しい世界が目指す目標というものを中国が世界に示していくことになっていかないと、中国が世界の指導者ということは言えません。ということは、時代の流れから言うと、もうすでにアメリカとヨーロッパの時代は終わった。これからはアジアが世界の中心であるんだ、そういうことから考えるとアジアの入り口は日本ですから、順序から言うと、日本から韓国、韓国から中国、中国からインドへという時代の流れが進んでいくということは確実な事実、というか確実に予想される未来であります。だけども世界文明の中心が中国とかインドへと移行していくんですけど、だけどもまだまだ現在の段階では、中国もインドも世界の指導者としての人格というか人間性や能力や文化というものを持っていない。中国もインドもまだまだアメリカやヨーロッパの学問、科学技術を学んで吸収してやっているという状態なんですよね。実際問題、中国やインドの学校というのはほとんど欧米の科学力というものを習得して、それを早く生活に応用していこうという段階なんですね。だけど日本はもうすでに欧米の科学技術というものを吸収し尽くして、感性度の高い商品をつくることに関しては、日本が既に欧米を抜いてしまっている。そういう状況にあるわけであります。その意味では、日本人はアメリカやヨーロッパの文化をある程度学び尽くして、技術力においても世界の頂点に立ってしまっているという状態にあります。それを考えれば、今アメリカ人に代わって世界の中心を担って、そして人類の指導者としての役割を果たし得る能力と人間性というものを持っている民族は、日本人しかいないということが言えるわけであります。**

**そういうことから我々は、今日本の真上に世界文明の中心があるんだという認識を持って、日本人がこれからアメリカ人に代わって世界に目標を与えて、人類の指導者としての働き・役割を果たしていかなければならないという自覚を持つ必要がある。それは職業からしてみれば、どんな職業であっても日本人は今自分がやっている職業において世界の頂点に立つんだ。そして世界の同業者は俺たちを目標にやってくるんだ。という自覚、意識を持って現在の自分の職業というものの発展を考える、ということをしていかなければならない。そういう時代になってきました。今自分のやっている仕事において、世界の頂点を極める。今自分たちのやっている仕事の仕方が仕事における世界の最高水準であって、世界の同業者は自分たちの仕事の基準というものを見習って、それを目標にしてやってくるんだという状態をこれから日本人はある職業においてつくって**

**いかなければなりません。そういう意味においてはアサヒグローバルさんも仕事において、世界が目標とするような水準の仕事の仕方というものをつくっていくということを目標にして、「俺たちは仕事において世界の頂点に立つんだ」という指導的な役割を果たすことができるような水準というものを会社の発展の目標に、まずしっかりと定めるべきであります。そのことによって自分たちのやっている仕事そのものに全社員が誇りを持って、消費者に対応することができる。今世界で考えることができる最高水準の最高レベルの仕事の仕方なんだ。これ以上はないんだという自信を持って消費者に対応していく目標をこれから我々は立てなければなりません。**

**だけどなかなか現在のところは、日本人がアメリカ人に代わって人類の指導者としての役割を果たさなければならないんだ、という認識がまだ日本人にはなかなかできていない。特に政治というのは三流だと言われて、非常に世界的には信用がないような状況が続いております。だけど経済面から言うと、日本製品は非常に完成度が高くて、故障がなく長持ちすると言われて信頼が高いんですね。だけども、国内の個々の企業においては自分たちが世界の頂点に立って、全人類の指導者として職業において果たしていかなければならない自覚が、まだ経済界においてないというのが現実であります。実際は世界的に名を馳せて大活躍をして、多くの国家・民族から受け入れられる仕事をしている会社はたくさんあります。だけど仕事の仕方において、自分たちが世界の指導的な役割を仕事において果たしていかなければならない、という誇りというものがまだまだ全社員に浸透してるとは言えないのが、現実の日本の経済界の姿ではないかと思います。**

**その意味では既に結婚されてお子さんがいらっしゃる方もいると思うんですけど、日本人は子どもを育てる場合でも子どもに対して、「君たちはこれから人類の指導者にならなければならない。だから全世界から信頼され尊敬されるような能力と人間性を養っていかなきゃならないんだよ」と言って、自分は将来人類の指導者としての役割をなんらかの意味で果たさなければならない人間なんだ、ということを子どもにちゃんとわからせて、「そうなんだ」と子どもが思って勉強し成長していく教育の仕方、そういう育て方をこれから日本人はしていかなければなりません。そういうことをしないと、日本人としての誇りというものを持って生きる、あるいは日本人が誇りを持って世界に出ていく状態にならないということですね。残念ながら、まだまだ経済的にも政治的にも外国に出て行くと、媚びへつらうような姿勢が日本人には強くて、堂々たる風格で自信を持って相手に対応して、相手から本当に尊敬されて尊ばれるような人物というのがなかなか日本人としてたくさんは出てきていない。何とか日本人の自覚を明確に、時代を担う指導者としての自覚をつくっていって、ある意味で国家的な国民に対する要請として、政治家自身が言わなければならないことなんじゃないかと思うんですけども、民族の誇りをつくっていって、いつまでも謝罪外交をして、日本人は悪かったというようなことをいつまでも子どもたちに教科書で教えているようなことでは、いけないと思います。新しい民族の誇りをつくっていく。過去を誇りにするのではなく、これからの我々の生き方において日本人は世界から尊敬されるような状況をつくっていって、誇り高い生き方をするということを我々はこれから考えていかなければなりません。ですから是非アサヒクローバルさんにおいても、全社員が世界からと言わないまでも、社会から尊敬されて信頼されるような人間性、人格、能力というものを自分のものにしていく。それを仕事を通して自分の在り方を実現するような目標を持って、仕事をしてもらいたいと思います。これが今の世界的な激変の時代における、日本人としての対処の仕方と言うことができるものだと思います。とにかく今世界的に言ってもあるいは国内においても、人々が求めているものは変化なんですよ。しかもより良い方向に変化させるという努力をすることによって、多くの人々の注目・**

**関心というものを惹きつけることができる。過去の延長線上で考えてはならない。今のままでいいというものはない。あらゆるものを少しでもより良い方向に変化させていく努力を日々、時々刻々として全社員が考えて仕事をしていかなければならない。仕事の仕方ということもそうですし、また自分たちが習得する能力の面においても、また人間関係や人間性の面においても、とにかくはより良い方向性に物事を進めていく。より良い変化をつくっていく。そのことに全力を傾けて努力をするということが、今の時代に求められている。とにかく消費者は変化を求めているんだ。より素晴らしい変化を求めているんだ。より素晴らしい変化、より良い変化というものをどのように自分自身がつくり出していくか。消費者と長く付き合えば、「君は随分成長したね」と付き合う中で言われるような自分をつくっていくことを考えていかなければなりません。**

**建築・建設という仕事は、建てて終わりではないですよね。いろいろなケアの面でも一生お客様と付き合うものですよね。最初、契約をして建築の計画を立てて、建て始めて完成して、そして受け渡しをして、相手に渡した後も毎年何回かお宅を訪問して、「いかがですか、具合悪いとかはありませんか」と聞いて回って、また補修の仕事をもらう。あるいは改築の仕事をもらう。そういう感じで関わっていかなければならない仕事ですから、その中で自分の仕事を通しての成長度合いをお客様に感じてもらって、褒めてもらえるような人生を考えていかなければならないのが、建設業というものの仕事の在り方ではないかと思います。自分を成長させるという意味で変化させなければならない。去年と今年の自分が同じであってはならない。去年より随分成長したね、と会社内でもあるいは社外でも言われるような自分をつくる。それが仕事をしながら自分自身を鍛えていくということになっていって、仕事をして良かったと自分自身も思えるような人生になっていくのだと思います。激変の時代、どのようにより良い方向性に変化をつくり出すかが最も大事な課題だということを考えてみてもらいたいと思います。**

**変化の時代というのは、往々にして変化対応能力というのが大事だと言われます。変化にどのように対応して、敏速に対応して変化についていくかという。そういう変化対応能力というのが大事だと言われるんですけど、考えてみれば変化対応能力というのは、変化が起こってからどうしようかと考えて、それに自分自身を適応させていくという生き方なんですよね。そういう生き方では、永遠に問題の後追いとなってしまう。問題の後を追っていくという風な生き方から脱却できません。これではやっぱり辛い苦しい生き方になってしまう。だから今本当に激変の時代において大事な生き方というのは、決して変化対応能力じゃないんだ。今一番我々に求められているのは、時流独創。「ときの流れは俺がつくる」という精神であって、変化の後からついていくんじゃなくて、自分自身が変化をつくり出し、自分自身が激動をつくり出し、自分自身が動乱を導くという。すごい激しい創造的な生き方というものが、今の時代においては求められていると思います。そういうことをやらないと、今の時代を楽しく、生きがいを持って生きていくことができない。問題が起こってからどうしようかと思っているようでは、苦しい辛い人生となる。でも、自らが変化をつくり出すという積極的な意図を持って、時代の流れを自分自身がつくっていくんだ。自分自身が歩いた後を皆がついてくるんだという感じで、ときの流れは俺がつくるということを考えていかなければならない時代であります。**

**というのは、我々は何のために生まれてきたのか。人間が生まれてくるのは何のためか。そのことを学問的に考えてみると、人間が生まれてくるのは歴史をつくるためなんですよ。新しい時代を呼び起こす、つくるために生まれてきたんだ。よくどうして俺はこの時代に生まれてきたんだと、なぜ俺は生まれてきたのか。理由はなんなのかと問うことがあるかと思いますが、すべての人間**

**に共通する出生の理由というのは、ただひとつで歴史をつくるため。というのは、基本的に言って生まれてくる人間がいなければ、歴史が止まってしまう。生まれてくるというのは、少なくともその時代を一歩前に進めるという課題を背負って、我々は生まれてきているわけです。そういう意味でも、人間が生まれてくるのは歴史をつくるためなんですよ。歴史をつくろうと思ったら、過去の人間が誰もやったことないことをやらないと歴史はつくれないんですよ。過去の人間と同じことをやっていたら、歴史は停滞するわけですよね。歴史をつくるということはできない。実際問題、過去を振り返れば、明治維新。まだちょんまげがあって、刀を挿していた時代ですが、100年経ったらこんなにも変わってしまうと。それほどまでに我々は100年でこんなにめちゃめちゃに社会を変えてしまう。それほどまでに我々は過去の人間が誰もやったことないことを何かしら皆やって、そして素晴らしい変化というものを現実につくり出してきたのが歴史なんだ、ということなんですよ。そういう意味では、歴史を振り返るならば、我々は過去の人間が誰もやったことのないことを何かやって、 歴史をつくるという仕事をするために生まれてきているということがわかるはずであります。**

**だけどなかなかそういう思いになれなくて、「俺なんかダメだ」という気持ちになっている人も随分といらっしゃると思うんですけど。学問的に言って、なぜ人間は歴史をつくるために生まれてくると考えなければならないのか、その根拠がどこにあるのかというと、どんな人でも「俺も何かできる」という気持ちになってもらえると思うんですよね。その根拠とは一体何なのか。我々は皆、お父さんお母さんがいて生まれてくるわけですよね。お父さんお母さんがすでに亡くなってしまった人もいるでしょうし、いろいろ家庭の事情はあるでしょうが、とにかくは生まれてくるということはお父さんとお母さんがいないと生まれてきません。とにかく子どもというのは、過去の人間のふたり分の可能性を一身に受けて生まれてくる。そういう生物学的な流れ、根拠を持って子どもは生まれてくるわけです。子どもというのは、お父さんからもらった遺伝子とお母さんからもらった遺伝子を自分の中にいただいて生まれてくる。だから生まれながらに親を超えて生まれ出てくるんだ言うことができるわけであります。過去の人間のふたり分の遺伝子、可能性というものを子どもはいただいて生まれてきている。だから生まれた瞬間から子どもは親以上の方生き方ができる。親以上の何かができる。そういう可能性をいただいて生まれてきていると言えるわけなんですよ。だけども、お父さんお母さんから遺伝子をもらって生まれてくるだけでは遺伝子は過去ですから、要らない過去の人間を超えるような仕事はできません。**

**だけど、なぜ一体人類は、100年経ったらこんなにめちゃめちゃに世の中を変えて、発展させてしまうのか。そういう状態を実際問題つくり出してきたのか、その理由はどこにあるのかということを考えてみると。皆、お父さんとお母さんから遺伝子をもらって生まれてくるんだけど、命というのは有機体なんですよね。どういうことかと言うと、お父さんとお母さんからもらった遺伝子が自分の命の中で有機的に絡み合って、そしてその有機性の中から湧き出てくる相乗効果、シナジー効果として出てくるものが、その子の力なんですよ。遺伝子からもらっただけでは過去を超えられません。だけども両親からもらってきた遺伝子が自分の中で有機的に絡み合って、その相乗効果として湧いてくるものがその子の力。過去にあったものの足し算じゃなくて、掛け算なんですね。そこから湧いてくるのは確実に全く過去になかった新しい力なんですよ、新しい能力なんですよ。これがシナジー効果とか相乗効果と言われる現象の構造なんですよね。シナジー効果として出てくるものが自分の力だから、生まれてくる子どもは、誰でも過去の人間が誰もやったことがないことをできる独特の力を皆いただいて生まれてきたんだということができるわけです。**

**これが時代を経過する、時を経過するごとに人類は確実に新しいものをつくり出し、常に時代をより良い方向性に変化させてきたという根拠になるものです。生まれた瞬間から今までの人間が誰もやったことないことを何かやって生きて死んでいかないと、俺は時代に生まれてきた使命や役割を果たすことはできないんだ、と思わなければならない。自分には確実に過去の人間が誰もやったことがないことができる力が、自分には与えられているんだということを信じないといけないと思うんですよ。その気持ちになれば、一体何を持って自分は過去の人間が誰もやったことないことをしようか、という思いになっていきますから。確実に何かしら新しいことができる。そういう思い、力が命から湧いてくるということになってくるはずなんですね。**

**一応自分の生き方の基本として、生まれてきたからには誰でも過去の人間が誰もやったことないことを何かやって生きて死んでいかないと、時代に生まれてきた価値がない。そして時代に生まれてきたということは、時代の中で何かしら過去の人間が誰もやったことのないことをやって生きて死んでいく、ということをしないといけないわけですから、だから確実に時代が持っている学問や文化の水準を自分自身が習得できて、そしてそれを習得した上で、それを超える何かをやっていくという力が、全ての人間に与えられているわけであります。生まれてきたからには、時代において何かそういう誰もやったことないことができる、という力を与えられて生まれてきている。「俺は時代において何をしたら良いのか」「俺は時代において何をして新しいことをやろうか」という思いを持って、我々は仕事をしなければならない。**

**人生というものを考えると、いろんな仕事がある中で偶然かどうかわからないけど、とにかくは建設業という仕事に取り組んで、しかもアサヒグローバルという会社に入社して、ここで仕事をすることになった。これはある意味では、ものすごい大きな因縁、理由があるはずなんですよ。今自分がやっている仕事というのは、なぜ仕事に出会ったのかを考えていくと、そこには本当に人間の力では考えることができないような、必然性、宿命というものがあります。だからアサヒグローバルに入って仕事をしているということは、ある意味で自分の命に先天的に定められてい宿命というものが、仕事に導いてくれたという理由がある。ということは、今自分のやっている仕事は自分が時代に生まれてきた使命を果たすということと、何かしら関係しているんだと考えなければならないわけです。皆さんがここにいるということは、決して偶然ではない。宇宙には偶然はない、すべてが必然である。無駄なことは何一つ起こらない。そういう必然性を考えるならば、自分が仕事に結びついたことには人知を超えた天の計らいがある。そう言わなければならない。命というのは自分でつくったものじゃなくて、つくられた命を与えられて生まれてくるわけですから、その命が持っている宿命というものの中には、確実に人知を超えた天の計らいと言えるような、神仏の計らいとも言えるような人間技では考えられないような、理由というものが込められているわけであります。そう考えると会社で自分は自分の力を発揮して、そして仕事において何かしたら過去の人間が誰もやったことがないような何かを探し出す、掴み取ろうというような気持ちになっていただく必要があるわけですよね。自分の命に適した職業と遠くないんだと。なんらかの必然性があるという仕事に結びついているんだ。命そのものが求めている仕事と決して遠くはない。必ず仕事を通して自分は自分の時代に生まれてきた使命を果たし得る。そういうことに結びついていくんだと考えておかなければなりません。そういうところから我々は、時流独創という「ときの流れは俺がつくる」という生き方を志すというか、考えるということを是非してもらいたいと思います。生まれてきたからには過去の人間が誰もやったことがないことを何かやって生きて死んでいかないと、時代に自分が生まれてきた意味がないんだ。一体、天は、神仏は、宇宙は、**

**歴史は俺に何をしろと言っているのか。自分の命にいかなる使命が託されているのか、ということを是非探し求めながら生きるという生き方を考えてもらいたい。時流独創の言葉に込められた思いであります。**

**とにかく今人間に求められている生き方は、決して変化対応能力じゃない。それでは生ぬるい。辛い苦しい生き方から脱却できない。問題が起こってからどうするかを考えるような問題の後追いでは問題の連鎖から脱却できない。素晴らしい人生を生きようと思ったら、とにかく時流独創。仕事に歴史をつくるんだ。会社に歴史をつくる。アサヒグローバルに歴史をつくる。これまでやってきたことの踏襲ではなくて、何かしらまだ誰もやったことがない新しい何かを俺は会社にいる間に何か一つ付け加えて、そしてアサヒグローバルを卒業するんだ、と。何かしたら俺にしかできない、新しい可能性をアサヒグローバルにつくって俺は退社するんだという気持ちが必要であります。どんな人間にも、とにかく時代に生まれたからには時代においてやらなければならない使命、仕事が与えられている。何気なく俺は生まれてきたんではない。時代から必要とされて自分は生まれてきたんだ。一体何をしろと、時代は俺に要求しているのか。俺の時代に生まれてきた使命というのは、…使命というのは命の使い所です。俺の命の使いどころ、俺の使命は一体何なんだ。何を俺に時代は要求しているのか。そのことを大事に考えながら仕事をしてもらいたいし、何かしら仕事をする上でより良い方向に状況を持っていく意識で仕事に取り組んでいただきたいと思います。これはまあ今日は今年最初のセミナーですので、年頭にあたってそういうこと、気持ちを新たにして、自分の素晴らしい人生を考えていく仮説の月ですので、こういう話をさせてもらっているんですけど、一年の計は元旦にありと言われますので、自分の人生を考えるならば百年の計を持って我々は今年を生きなければならない。そういうところから是非高い目標を自らに掲げて、理想を持って希望を持って仕事をしていただきたいという風に願っているわけであります。**

**とにかく、激変の時代は変化を求めているということなんですよね。だから我々はその時代の中で生きるためには、あらゆるものを激しく変えなければならないし、また自分自身をも激しく変えて成長させなければならない。だけど、激変の時代というのは今に始まったものではなくて、よく歴史を見てみれば、20世紀を振り返れば、20世紀の初めには第一次世界大戦がありましたし、それに引き続いて大恐慌というのがあって、全世界的な経済不況があった。それから第二次世界対大戦があって、その後、日本には朝鮮動乱という事件があって、それから戦後の急速な経済発展があって、昭和40年には大不況と言われるような、今日では考えることはできないような大きな経済的な落ち込みがあって大不況でした。その後、第一次石油ショック、第二次石油ショックがあって、それからバブルがあって、それからベルリンの壁の崩壊があって、東西の冷戦の終結があって…という具合に歴史というものを細かく見ていったら、とにかく歴史はいつだって激動なんですよね。激変なんですよ。歴史はいつの時代をとっても常に思わざる変化が次々と起こってくる。歴史的に一回きりの大変な出来事が、どの世紀をとっても次々と起こってきている。それが歴史の現実なんですよ。激動の時代というのは、今だからというんじゃなくて歴史は常に激動だ、ということです。常に歴史の中で生きる人間は、または生まれてきた人間は、常にその激変・激動という中でどのような生き方をしたら良いのか、ということを覚悟として考えていなければならない。というのが人間の人生の現実ではないかと思います。**

**特に日本人にとっては1945年（昭和20年）の敗戦というのがあって、それまで自分が持っていた財産は全く紙切れになってしまって、貨幣価値が激減してしまった。土地を持っておった人も**

**それが奪われてしまって、本当にも人生真っ逆さまに変化してしまうような状況がありました。そういうことを経過しながら我々は今日まで歴史をつくり生き延びてきたわけであります。それほどのとんでもない激変というものが、多分皆さんのこれからの人生にも出てくると思うんですよ。信じられないような大激変、大きな難問というものがいくつか人生にはやってくると思います。それに備えて生きる覚悟がやっぱり必要なんですね。またそういうことを考えていくと歴史というのは常に激変なんだ、激動なんだ。ということを忘れてはならない。だけども今日我々が迎えている今の激変の時代というのは、ある意味で歴史的なこれまで我々が体験した激変とはちょっと質が違うんですね。これまでの激変というのは、時代というものをより発展させる、前へ前へと推し進めていくために問題が起こってきて、その問題を乗り越えていくことによって、時代は発展・成長していった。今我々が抱えている激変というのは、それとちょっと様子が違う。時代そのものを発展させるんじゃなくて、時代そのものを変えていく、新しい時代をつくっていくという意味での大激変なのであります。ということは、常に歴史は激動なんだけど、近代から次の新しい時代へと時代を変えていくという意味での激変・激動の時代なんだ。ということは、今我々が迎えている時代は、400〜500年に一度しか来ないような大きな時代の変動の中で生きていると言わなければならないわけであります。今は我々が考えなければならない変化をつくり出す生き方というのは、ただの変化ではない。ただより良い方向性に導くだけではない。求められているのは、原理的変革なんだ。あるいは革命的な変革なんだ。物事の表面的なアレンジではなくて、今の時代に求められるものは原理的変革である。根本から物事を変えていく。原理から変えていく。表面的なアレンジメントじゃなくて、根本の原理から変えていく。そういうことが今求められているわけであります。**

**実際問題、先ほど申し上げたように近代は理性を原理にして歴史をつくってきました。その時代においては人間の本質は理性だと言われていた。しかし、今日においては人間の本質は感性だ、心だと言われるような時代になってきました。人間観そのものが原理的に変革した。人間観の大激変、原理的変革が今進んでいるわけです。革命的な変化が今時代においては出てきている。我々がこれから考えていかなければならない時流独創という変化をつくり出す仕事も、ある意味では原理的変革という変化に値するようなそういう仕事をしていかなければならないということです。とにかく一応人間観という観点からは、人間の本質は心だ、感性だと言われていますから、そこからどういう原理的変革が今出てきているかと言ったら、人間の本質は心なんだと、だから今の人間が本当に求めているものは心を満たすもの。理屈はたくさん、心が欲しいという叫びが今の人間の本心というか、一番求めているものである。もう理性を満たすもの合理性だけでは満足しない。心が満たされないと幸せではない。心が満たされないと本当には満足できない。そういう段階へ今の人間はきているわけであります。**

**そういう観点から考えてみると、これまでの経営は理性型の経営でした。理性型の経営というのは、支配と命令と管理。上意下達、上の命令を下の者が聞いて動くという。そういう機械的な、合理的な経営がもっぱらでした。だけどもこれからは理性型の経営から感性型の経営へと変えていかなければならない。これはどういうことなのかと言ったら、これからの経営の精神となるものは、決して昔のような支配、命令、管理ではない。これから大事にしなければならない会社運営上の精神は、愛と対話とパートナーシップだ。会社を動かしていくために必要なのは愛だ、対話だ、パートナーシップだ。命令じゃない、支配じゃない、管理じゃない。そういう気持ちの切り替えをやっていかなければならない。これはトップに立つ経営者だけの問題ではなくて、各グループ、課**

**とか係があるのなら、集団の長たる者は常にそのことを心に持って部下に対応していかないと、これからの組織は動かないし、またこれから人を本当に活かして使って、一人ひとりの人間の力を存分に発揮してもらうという組織をつくっていこうと思ったら、決して支配と命令と管理ではいけない。愛と対話とパートナーシップという精神で臨んでいくということをしないと、これからの人は働いてくれない。それを常に思いながらリーダーは、長たるものとして部下に対応していくことをやっていかなければなりません。支配的な力を磨いていく傲慢な態度じゃなくて、常に対話を通して納得ずくで、しかもお互いにパートナーなんだ。お互いに協力し助け合ってやっていくんだ。愛という精神を基本に組織力というか、人に対応する力をつくっていかなければならない。**

**会社という組織そのものもこれまでの理性型の資本主義経済という理性によってつくられた会社組織というのは、どういう構造だったのかって言ったら、理性によってつくられた会社の組織というのは大体が仕事のつながりと役職のつながりという、合理的な関係性だけで動いていた。仕事のつながりと役職のつながりという合理的な、能率本位の無駄のない仕方の中で人間が働くことによって、ストレスを感じ、また合理的・理性的な仕事の仕方というものに支配されて、何かしたら規則に縛られて自分自身の血の通った温かな心を使うという風なそういうことがなくなってしまった。結果として仕事のつながりと役職のつながりだけで動く組織というのは、その社員から人間性を奪い、血の通った温かな心を奪い、社員の心を冷血動物のような非常に冷たい状態にしてしまった。結果として人間性の破壊、心の喪失状態をつくってしまったと言われているわけであります。そのことを考えると、これからの組織というものはどういう会社の在り方、組織をつくっていかなければならないか。**

**これからは人間の本質は理性ではなくて感性・心なんですから、会社というものも人間関係によってつくられるそういうものです。人間が会社というものの最も根本の存在になってくるわけですから、会社も根底に添えなければならないものは全社員の心のつながり、心の結びつき、心の通い合いを土台にしなければならない。それがなければ、残念ながら会社というのは機械的な非人間的な組織になってしまう。本当に会社というものが、人間的な組織になるためには何が一番大事なのかと言ったら、全社員の中に心の通い合いがある、心の繋がりがある、心の結びつきがあるという状態をつくることを考えなければない。そしてその心のつながりを根底に据えて、その上に仕事のつながり、その上に役職のつながりを乗せる。三次元構造で、三段構えで初めて人間的な組織というものが、できるんだという風に考えていかなければなりません。これも組織論として大激変なんですよ。これまでとはまったく根本的に違う、組織の構造というのが今これから要求されてくるわけであります。**

**そういう理性から感性と変わっていく、人間観の大激変というものを出発点として、経営の仕方も変わり、会社の在り方も変わり、人間同士が付き合う場合でも理屈で付き合っていてはならないと。大事なことは人間は心を求めているんだ。心をあげなければならない。理屈をあげたって素晴らしい人間関係はつくれない。理屈をあげている分には、表面的な人間関係だ。皆心が欲しいんだから、皆理屈じゃない。理屈をあげたって素晴らしい人間関係はできない。あげなければならないものは心なんだ。そのことを本当にわかって我々は人と付き合っていかなければならない。夫婦の付き合いも親子の付き合いも全部心が欲しいんだ。会社内部でも上司と部下の付き合いでも心が欲しいんだ。心をあげなかったら人間関係は冷たくなってしまって表面的な人間関係に終わ**

**ってしまって、本当の友情はできない。どういう人と関わる場合でも、相手が本当に求めているものは心なんだ。だから心をあげなかったら本当の人間関係はできないんだ。そういうことを常に頭においていかなければならない。お客様も心が欲しいんだ。ただ型通りの理屈だけの仕事では、他の会社と同じなんだ。同業他社と一歩違う、そういう仕事の仕方を考えていったならば、我々は決まった規則通りの仕事というものを超えて、それも大事なんだけど、それを超えてとにかくはお客様との心の結びつき、心の通い合いというものを大事にしていく。お客様も心が欲しい、心が満たされたいんだ。お客様の心を満たしてあげるためには、どういうことを言い、どういう行動をとり、どういう仕事をしたら良いのか。そう考えることによって満足度の高い仕事というものが出てくるわけであります。とにかくこれからは何をする場合でも、心をあげなければならない。心が一番大事なんだ。心という中に感情もあるわけですけど、人間の感情が大事なんだ。理屈さえ通れば感情なんかどうでもいいのではなくて、感情が一番大事なんだ。相手の感情に逆らうようなことを言ってはいけない。相手の感情を刺激しない。相手の感情に喜びを与えることができるような、相手を気持ちよくさせてあげることができるような感情というものを常に考えて、理屈じゃない。感情、感性が大事なんだ。そこで初めていい仕事終わりになるし、いい仕事ができるんだ。というのを是非考えてみてもらいたいと思います。**

**心をあげるとはなんなのか。これも考えてみてもらいたいんですけど、心をあげるということは一体何なのか。一体人間の命は何を求めているのかと言ったら、人間は誰でも愛されたいんですよ。認めてもらいたいんですよ。わかってもらいたいんですよ。褒めてもらいたいんですよ。四つが心を満たすということに対応する内容なんです。誰も注意なんかされたくないんだ。誰も叱られたくないんだ。批判なんかされたくないんだ。時には、あのとき叱ってもらったから俺はこうなれたとおっしゃる方もいらっしゃるんですけど、それは叱り方に愛があった場合だけであって、理性的に叱ってしまったら、そこには恨みが残りますよ。反発反感が出てきますよ。まずはとにかくは皆褒められたいんだ。褒めて人を育てるということを考えないといけません。皆自分の思いをわかってもらいたいんだ。共感同苦、共感同悲、自分の悲しみを本当にわかってもらいたい。自分の辛さや苦しみを本当にわかってもらいたい。それが心を満たす行為、心をあげるということなんだ。相手の悲しみを我が苦しみとして受け止めてあげる。相手の苦しみを我が悲しみとして感じてあげる。それが心はあげるということにもなってくるわけです。愛が欲しいというのは恋愛ということではなくて、愛するということは認めることである。許すこと。待つこと。信じること。いろんなものが愛の中にはあるわけですけど、基本は肯定すること。それが愛のベースとなる心情なんですよ。さらに愛は思いやりである。相手の思いを我が思いとして感じるし、相手の心を思いやってあげるというのが愛。いろんな愛の段階がありますけど、心が欲しいということにおいて言われるのは、決して恋愛的な愛というわけではなく、認めることである。わかってあげる。許すこと。待つこと。信じること。そういうものを皆求めている。理屈じゃない。**

**もちろん人間には理性がありますから、大事なんだけど理屈は二番目。一番大事なものは心。心が通い合って心が結びついたら、理屈を超えて人間は信じ合える。理屈における考え方の違いも心が通い合ったならば、あまり考え方が違っても対立という状況になってしまわない。考え方が違うから、だからお互いに教え合おう、学び合おうという気持ちにもなっていくことができるわけです。心が結びついてないと、心が通い合っていないと、考え方の違いは敵対関係になってしまう。心が結びついていれば、考え方が違っても「相手はそういう考えなんだ」ということを理解しようという愛が目覚めてきますし、また相手の考えの中で何かしらいいところを学ぼうとする。**

**お互いに教え合って、学び合って成長していけるんだ。とにかく会社というものが人間的な組織ということになるためには、会社の土台に心の結びつき、心の通い合いがベースに大事なんだ。全社員の中に心の結びつき、心の通い合いをつくっていく。そのためには会社としてやらなきゃならないことが個人面談。個人面談というのは、社長さんが全社員の個人面談をするだけじゃなくて、グループがあったならばそのグループの長たる者がそのグループの一人ひとりと個人面談をする。また係長さんは係長さんとして自分の関わりの中の部下と個人面談をする。その組織の中の小さなグループ単位でやっていくことによって、だんだんだんだんと全社員の中に心の理解というか、お互いに気持ちがわかり合えるという状態ができていくことになるわけです。またどういう風に心の通い合い、心の結びつきをつくっていくか。本当に夫婦関係でも大事なことで、親子関係でも会社でも大事。とにかく根本の、全ての人間関係において、いつもちゃんとこう自覚していなければならない大事な問題なんですよ。とにかく理屈ではいかん。どんなに正しいことを言っても、理屈で正しいことを言えば言うほどムカつくんだ。理屈だけではうまくいかないということをよくわかっていただくということが、自分の幸せのためにも人を幸せにするためにも大事な課題であります。とにかく今はそういうことで、今は原理的変革が進んでいるんだ。我々も原理的変革に対応して、自らの生き方や仕事の仕方を原理的に変革していかなければならない。そのためには時代・消費者・会社・上司・部下・同僚は一体何を求めているのか。その場に存在する感情や欲求をちゃんと掴み取って、その感情・欲求に対応していくような自分のやり方というものが、心というものを大事にする生き方になってくるわけです。心を満たすということをもっともっと真剣に考えて生きてもらいたいと思います。**

**原理的変革というのはそのことだけじゃなくて、いろんな意味で変革というものが進んでいるわけです。具体的な問題として我々は政治を原理的変革しなければならないし、経済も原理的変革をしなければならないし、社会の在り方も原理的変革するということを考えていかなければならない。そういう状況にあります。これから政治に対して関わって、どういう風により素晴らしい社会をつくっていくかということは、自分自身が選挙を通して関わっていかなければならない課題なので、変革の方向性ということでちょっと簡単に申し上げたいんですけど。今の政治がうまくいかないのは、政党があるためなんですよ。今時代は近代から次の新しい時代へと変わろうとしているわけですから、政治も近代の政治から次の新しいステージへと激変させないといけないわけであります。だけど今の政治は近代の政治の在り方をそのまま引きずっているから、時代に合わないんだから国民からそっぽを向かれている。政治の具体的なさまざまな政策、声もなかなかうまくいかない、ねじれ現象が生じてきている。全部、政治が政党というものを持っている近代の政治のパターンを引きずっているから。時代は脱近代という方向性で激しく変わろうとしていますので、政治に政党があるのは近代になってからできてきた政治形態なんですよ。だから政党政治は近代の政治です。政治を原理的に変革していこうと思ったら、政党のない政治をつくっていくことを考えなければなりません。政党が存在する限り政治は混乱するんですよ。政党が存在することは今の政治の一番の大きな癌、ネックなんですよ。政党が存在することによって政治家は常に権力闘争、政権闘争を繰り返す。自分たちが政権を取らないと、自分たちの思うように政治ができませんから、とにかく政党というものは自分たちの党が政権を取ることに血道をあげる。最大限の努力をする。そうなれば確実に政治の世界というのは、与野党の対立という醜い、お互い激しく罵り合うという状況で政治は続いていってしまいます。結果として国民から見て、「またあんな事やっていて」と醜い政治家の人間性や醜い状況に国民は失望する。それは政党が存在するからです。政党が存在すれば、議員は数になってしまう。数さえ集めたら勝てると、数の暴力が通用**

**するような政治から脱却できません。政治というのは原理的には近代の政党政治から脱政党政治という方向性に動いていて、将来は政党がない政治の形というのがつくられていく。そういう方向性で動いています。そのことを意識しながら、我々は選挙民として政治に関わっていかなければなりません。政党のない政治、政治家が権力闘争でお互いに罵り合うという醜い人間性を持った政治家になってしまわないで、もっともっと国民のため素晴らしい活動ができる政治家をつくれるのか、それを考えていかなければなりません。**

**経済においても、近代の経済は資本主義経済でした。だから今は、経済社会は脱資本主義という方向性で動いております。将来は資本主義ではない、新しい経済体制である人格主義経済というのが将来の経済社会のシステムになってくるはずなんですよ。資本主義経済というのは金を目的にして人が働くという経済システムなんですよ。だからそこで働けば誰でも金を増やすために、金をつくるために働かされている。金の奴隷になってしまう構造に皆引きずり込まれる。「俺はそうはならんぞ」と言っていても、資本主義経済という体制の中で働けば、誰でも金の奴隷になって金を目的にして働かざるを得ないという組織になっているんですよ。それでは人間性は破壊されてしまう。本当に経済というのは人間の為にあるのであって、人間の経済の為にあるのではない。これから経済社会をどのように原理的に変革していくかを考えなければならない。経済活動をすることによって人間性が豊かになり、そのことによって人間が本当に幸せな人生を歩めるという状態に持っていくためには、経済活動そのものが人間の格をつくるための手段なんだ。そういう風な形の経済活動に変えていかなければならない。経済活動が人間を本物の人間に成長させていく。人格をつくっていくという活用の仕方に変えていく。そのことによって我々は将来、人格主義経済という人間の格をつくる、それが経済活動の目的なんだ。そういう経済に変えていかなければなりません。**

**社会というものも近代社会は民主主義社会と言われていて、ほとんどの人が民主主義社会が理想であって、「民主主義社会にまだなってないじゃないか」と言って、民主主義社会にしようというそういう気持ちでまだまだ世界はいるんですけど、だけどもう社会の現実はどうなってるかと言ったら、「どうしたら民主主義社会よりも素晴らしい社会ができるのか」ということを考え始めている。民主主義社会は近代の社会であって、古い。今は脱民主主義という方向性で社会の新しいやり方が模索されている段階であります。なぜ、民主主義社会はダメなのか。それは民主主義社会は皆が権利を持っていて、権利を主張し合うというところから始まったのが、近代民主主義の出発点であります。だから民主主義社会というのは、権利を主張するということが最も大事だと言われており、民主主義社会は権利を主張する人間だけが得をして、権利を主張しない人間が損をする。という風にできているんですよ。自分の権利をとことん主張するような自己中心的で身勝手な人間だけが得をするんですよ。そして権利を主張しない、謙虚な人は損をさせられてしまう。これが民主主義社会の実態であります。民主主義社会には権利と義務という社会規範があるんですけど、だけど現実は権利も主張して、義務というのはひとりの人間として果たさないといけないんですけど、民主主義社会の現実は「俺に対する義務を果たしていない」と、義務すら要求するという形で使われてしまっている。権利を主張して義務を要求する、これが現実の民主主義社会の実態であります。権利を主張するというのは、お互いに責め合うということになっていますからね、不完全な人間が責め合ったら、人生は地獄ですよ。本当に我々がこれからつくっていかなければならない社会、民主主義社会というのは、責め合うのではない、許し合って生きていこうという気持ちを根底に持った社会をつくっていかなければならない。新しい、より高度な社会の在り方**

**をなんと言うか、互恵主義社会。これからは、不完全であることを許し合って、助け合って生きていく。そういう社会の構造というのをこれからつくっていかなければならない。あらゆる面で原理的変革というものが、これから我々に求められているんだ。そのことを考えながら、今の時代を生きる必要があります。**

**というところでちょうど半分になりましたので、これから休憩に入りまして、後半の話は次にさせてもらいます。どうもありがとうございました。**

**それでは後半の話に入ります。**

**とにかく激変の時代というのは、さまざまな問題や悩みが生じてきます。激変・激動という状態ですから、いろんな変化が出てきます。そういうところから新しい問題、かつてない問題・悩みは出てきます。また人間観も激変していますから、人間関係上の問題もどんどん出てくるし、また経営の仕方や仕事の仕方という面でも原理的変革が求められていますから、またいろんな問題が出てきます。社会においても社会というのが変わっていくというところから、古い社会の在り方にとらわれて新しい社会の在り方に変わっていけないという状況からも問題が生じます。とにかく、激動・激変の時代というのはいろんな問題や悩みが生じてくる。そのことによって何かしら問題にぶつかって「もうダメだ」と思ってしまったり、あるいは問題に悩んで前に進めないという状態に陥ってしまうということも随分と人生にはあるんじゃないかと思います。だけどそういう人生の壁、人生の難関というものをブレイクスルーして、そして激動の時代をたくましく生きていこうと思ったならば、出てくる問題や悩みというものをどのように考えたら良いのか。そういうことが非常に大事な課題になってくるわけであります。確かに問題や悩みというのは嫌なもので、苦しい辛いものです。**

**問題が出てくるのは一体なぜなのかを考えてみると、問題も悩みもないという状態だと人間は成長しないんですね。会社でも問題がない、悩みがない状態では、「今のままでいいじゃんか」ということで、成長、どのように変化させていくかの新鮮味が出てこない。社会でも、犯罪も事故もない社会であったら、良くなっていかないで、「現在のままで良い」となり、何もすることがない状態で、犯罪もない事故もない状態では社会も停滞するんですね。そういう意味では、犯罪や事故ですら社会を発展させるために出てくるんだと言える、そういう現象なんですよ。ましてや自分の人生に出てくる問題や悩みというのは、自分を成長させるために出てくる問題、悩みだと考えなければなりません。問題や悩みは自分を成長させるために出てくる。今よりももっと成長しろよ、今のままではいかん、何かしら今までとは違う生き方をしろよという変化を自分に求める。自分に成長を求めるために問題や悩みは出てくるんだということをちゃんと押さえないといけないと思います。**

**そういうところから問題が出てくることを恐れない気持ちを我々は強く持つ必要があります。できることならば、出てくる問題を嫌がるのではなく、出てくる問題から逃げないで挑戦していくことを通して、自分自身を成長させていくことを考えないといけないわけであります。問題が乗り越えられなければ、自分は今の状態以上に成長していくことはできませんから、ある意味では時代の流れから取り残されてしまうことになってしまいやすい。そういう意味で、問題や悩みは自分を成長させるために出てくる。決して自分を苦しめるために出てきているんじゃないんだ。自分を絶望させるために出てきているんじゃないんだ。自分をダメにさせるために出てきているんじゃないんだ。自分を否定するために出てきているんじゃないんだ。問題や悩みというのは、た**

**だ一つ自分を成長させるために出てきているんだ。会社の問題や悩みも会社を発展させるために出てきてくれているんだ。と考えるということがまず問題や悩みに対応していく大事な心構えであります。そしてその次には、問題や悩みは自分を成長させるために出てきているんだと、だから自分を成長させるために出てきているんだから、逃げたらいかん。という気持ちを自分につくっていく必要があります。問題を嫌がって逃げたいとか、問題を嫌だと思ってしまうと、乗り越えられないんですよ。**

**もちろん、問題というのは苦しいので、ついつい早く問題から逃れたいという思いのもと、問題を乗り越えるんじゃなくて問題から逃げてしまう。よく学校なんかでも勉強ができなくなって、辛くなってくるともう勉強するのが嫌になって、勉強という場から逃げて、学校に行かないで遊んでしまう…そういう風なことで自分をダメにしてしまう。そうなってしまう子もいるんですけど。問題から逃げても、逃げれば逃げるほど、嫌だと思うほど、ますます問題というのは自分の肩に重くのしかかってくる。そういうものであって、人間そのものは不完全ですから、問題は常にある。問題は常にいろんなところから自分に降りかかってくるんですね。これが残念ながら人間が不完全ということによる必然的な現象なんですよ。問題というものから逃げられない。不完全であるがゆえに問題というものを常に背負って生きていかざるを得ない、それが人生である。問題から逃げるというのは、やっぱり人生に対する弱い生き方であるということになってくる。これは仏教なんかでは「人生逃げ場なし」と言って、人生というのは問題から逃げれば逃げるほど、ますます辛くなり、苦しくなる。結局人生の問題や悩みというのは、逃げても苦労だし、ぶつかっていっても苦労、どっちみち大変なものなんですね。だけど逃げて苦労すると、身を持ち崩してしまってダメになるんですね。問題から逃げないでその問題にまともにぶつかっていって、問題を乗り越えていく努力をすることによって、初めて我々は成長するという生き方を自分のものにすることができます。そういう意味では、問題は逃げてもぶつかっても苦労。どちらにせよ苦労するのなら、ぶつかっていかないと損、損ということになります。いわゆる阿波踊りを踊っているみたいな感じになってくるわけなんですね。「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らな損、損」ということです。ぶつかっていくことでする苦労をしないといけないことが次には必要になってきます。**

**問題にぶつかっていくためには、「問題は俺を成長させるために出てきてくれている」のだから、逃げてどうするという気持ちになって、負けないという気構えというものを人生態度としてつくっていく必要があります。そのためには何か問題が出てきて、辛くなったときに自分で自分に対して「お前逃げるんか」と聞くわけですよ。「お前逃げるんか」と自分に聞いて、それで逃げていたらなんとなく情けないと思いますからね。逃げないと言って問題に立ち向かっていく生き方をつくっていくことも考えないといけません。問題を辛い、逃げたいと思ったら問題を乗り越える力が出てこないんですよ。だけど、逃げて逃げて逃げまくってもうこれ以上逃げられないと思うと、もう後は死ぬしかないとなってくると、自分の身に降りかかってきている問題なんだから「俺が何とかするしかないと」思って、逃げている自分というものを見て、「これではいかん」と思って踵を返して、そして問題にまともに立ち向かっていこうとすると、さっきまでものすごく肩に重くのしかかっていた問題が、まともにぶつかっていこうと思うだけで、ふっと半分に減ってしまうんですよ。「俺がなんとかしないと」と思うだけで、命から問題を乗り越える力が湧いてきているんですよ。だから命から力が湧いてくると、さっきまでものすごく重かったものが半分くらいに減ってしまう。ひょっとしたら乗り越えられるかもという思いになってきてしまうもんなんですよ。これは長い間人生を生きてきた人は何度も体験していらっしゃると思うんですけど、逃**

**げれば逃げるほど辛い。しかし、腹を決めて「俺がなんとかするしかない」と決めたら、さっきまで重かった問題が半分に減ってしまうんですよ。それはもうすでに問題を乗り越える力が湧いてきているということなんですね。助けてもらいたいとか、誰かになんとかしてもらいたいとか、嫌だという気持ちがあると自分の底力は出てこないんですよ。どんな問題でも「俺がなんとかする」と腹を決めると、問題の重さや嫌さがふっと半分に減ってしまって、乗り越えることができるかもという気持ちが湧いてくる。それは自分の命の中に力が湧いてきた証明なんですよ。問題から逃げない、悩みから逃げないという気持ちを是非強く持ってもらいたい。これは自分を成長させるためなんだ。**

**だけど、多くの方が早く問題がなくなってもらいたい、早く悩みのない状態になりたいと思うんですね。人間の幸せは問題がない、悩みのない状態なんだと思ってしまって、早くそうなりたいと思うんですよ。だけども、先ほど申し上げたように人間というのは不完全な存在なんだ。だから、問題というのはなくなることがないんですよ。不完全だから問題や悩みはなくなることはない。なのに早く問題や悩みがなくなってもらいたいという思いを持って、問題や悩みのない状態が幸せなんだと思う人は、その人はもう一生不平不満、愚痴を言いながら生きて死んでしまって、決して幸せにはなれない人なんですよ。本当に我々が幸せを自分自身のものにしたいと思うならば、問題や悩みが出てこないことを願うんじゃなくて、出てくる問題や悩みを乗り越える力を成長させていくという努力をするんですね。本当に幸せを自分の手にする方法はありません。問題や悩みがなくなることを願えば、決して問題や悩みはなくならないんだから、問題や悩みをなくなることがもっと幸せと思う人は一生不幸な気持ちで終わってしまう。一生不平不満、愚痴を言って終わってしまう。結局は自分を不幸にする生き方なんだ。本当に我々は幸せと成功を人生において求めようと思ったならば、出てくる問題を乗り越えるしかないんですよ。実際問題、成功した人間は問題を乗り越え続けた人だけなんですよ。楽をして成功した人はいません。皆、成功した人間は出てくる問題を乗り越え続ける努力をした人だけ。問題を乗り越えることで人間は実力をつくっていくんですよ。問題を乗り越えなかったら実力はできないんですよ。本当に強く生きる力としての実力というのは、問題をひとつ乗り越えるごとに成長するんですよ、強くなるんですよ。それは人間の実力というか、人間力をつくっていく唯一の方法なんだ。だから大事なことは、決して問題と悩みがなくなることを願わない。出てこないことを願わない。人間において問題と悩みが出てこないことを願うということは、それは人生からの逃げだ。経営者が問題が出てこない、悩みが出てこないことを願えば、それは経営からの逃げだ。問題や悩みがないようで、経営者はどうして経営能力を成長させることができようか。問題や悩みが出てきてそれを乗り越えることによってしか自分を成長させる、能力を成長させる、人間力を成長させることはできません。人生というのは、問題を乗り越え続けるしかないんですよ。これはあの有名な徳川家康の座右の銘においても、そのことが言われておるわけです。「人生とは重荷を背負って坂道を登るが如し」その荷を下ろしたいと思ったら、その時は自分が征夷大将軍から去るときだ。重荷を背負って坂道を登り続ける気力がある限り、自分はその任を全うできる。下ろしたいと思い始めたらもうそのときは、現役を去るときだ。「人生とは重荷を背負って坂道を登るが如し」それを下ろしたいと思ったら、もうそれは逃げに入ってるんだ。問題や悩みが出てこないことを願うのは人生または経営からの逃げだ。自分が弱いということですよ。**

**決して我々は問題や悩みが出てこないことを思って、ないことを思って幸せと考えてはならない。原理的に間違っているんだ。人間は不完全だから常に問題はある。問題が出てこないことはない。**

**もし今の自分に問題がないと思ったら、それはあるのに見えてないだけなんだ。あるのに見えてない、これ一番危険な状態なんですよ。問題があるのに見えてない、それが自分を堕落させたり、周りの人を不幸にする。今の家庭にどういう問題があるのか、自分の子どもにどういう問題があるのか、妻に、両親にどういう問題があるのか。その問題をちゃんと知って、その問題に対応するのが健全な生き方です。問題があることが健全であり、問題がないことは異常なんだ。常に問題をちゃんと正確に掴んでいることが完全なる経営であり、健全なる生き方である、正しい生き方である。問題がわかってないということが一番危ない。常に問題を掴んで、問題をちゃんと自分自身が自覚しながら乗り越えていこうとすることが、健全なまともな成功への歩み方であります。問題が見えてないようでは、健全な歩みはできない。常に問題はあるんだから、その問題をちゃんと掴んで、そしてぶれないように問題のない方に行くのではなく、出てくる問題を乗り越えていくことによって、会社を成長させる・自分を成長させるという生き方の道を選ばなければならない。**

**問題や悩みというのは、この方向にやってこいよと天が神仏が宇宙が、自分に求めているんですよ。問題のない方向に行ったら、それは堕落だ。問題の出てくる方向に向かって行ったら、君は限りなく成長できるぞと。問題や悩みは、成功への一里塚だ。本当に幸せになりたいと思ったら、出てくる問題を乗り越えろよ。というのが、宇宙によってつくられた命というものに、宇宙が期待している生き方であります。決して問題がないことを願ってはならない。問題が出てこないことを願ってはならない。常に問題は出てくる。いつでも問題はある。その問題は何なのかを知ろうとする努力、それがたくましく生きるということだ。本当についうっかりすると、皆問題や悩みがなくなってもらいたいなと思うんです。確かに問題や悩みがあると辛いから、早く問題から逃れたいなと思うんですよね。でもそれは残念ながら弱気、弱い自分なんだ。それが自分から幸せを奪うんです。それが自分から成功の人生を奪い取るんですよ。問題はなくならない、問題は常にある。問題というのは自分を成長させるために出てくるんだ。だから問題のない道を求めてはならないんだ。出てこない道を探して求めてはならない。問題のある所に向かうことが正しい道なんだ。問題が出てくる方向に進んでいったら成功するんだ。その問題を解くことによって、我々は新しい何かを掴むことができるわけです。問題がないようでは進歩はない。何も新しいものは出てこない。問題こそ成功への一里塚である。問題は、「君は成功できるし、幸せになれるぞ。君は成長できるんだ」ということを教えてくれているんだ。**

**ほとんどの人は問題のない道を探し求めるんですよ。出てくる道は間違った道だと思ってしまう。これは理性教育の弊害なんですね。問題が出てくるということは間違った道だと考える。問題が出てこない道を正しい道と考えてしまう。それが理性の判断なんですよ。理性は不完全な人間に完全性を求めるもの。理性的な判断の間違いなんですけども、とにかくは理性的に考えると問題が出てくると間違った道、問題が出てこない道を探して歩んでいくと、回答に到達する。答えに辿り着くというのが理性的な生き方なんですよね。そういう問題のない道を求めていくということは、結果としてもうわかっている答えに到達するだけで、学校の試験みたいなもの。新しい真理を発見したり、新しい何かを発見したりということはない。より時代を進歩させることもない。発明発見、時代を進歩する発見というものは皆、問題にぶつかってその問題から逃げないで乗り越えていくことによって、新しい進歩はつくられてくるわけですよ。ということは、今自分の持っている力でなんともならんというのが、本当の問題や悩みなんですよね。今自分の持っている力で解決できる、今ある自分の持っている力で答えることができる問題というのは、本当の問題ではない。一応学校で我々が学ぶような試験に出てくる問題というのは、答えがあるもので、その答えに**

**到達させる教育の一環としてその問題が与えられて、その問題を解いていくとすでにわかっていることにぶつかるというもの。そんな問題を解いても本当には人間は成長しません。本当に時代を一歩前に進める、歴史をつくるということにはなりません。それはまだ保守的な現実のわかっている答えに到達できる力をつくっていくための、まだ学習の段階なんですよね。**

**本当の問題というのは、今自分の持っている力ではなんともならん。今自分の思っている理性能力では如何ともし難いというというのが本当の問題なんだ。今自分の持っている力で何ともならんという問題にぶつかっていくと、初めて命に潜在する底力、潜在能力が出てきて、そしてその問題を乗り越えさせてくれるという状態になるんですよ。今自分の持っている力でなんともならんという問題にぶつからないと、潜在能力が出てこないんです。命に潜在する力が出てくることによって、初めて本当に人間の生きる力、能力が成長するわけですね。というのは、我々が理性能力として持っている力というのは、原理的には他人がつくった知識や技術を学習して覚えて、自分のものにして使っているのが理性なんですよ。他人・過去の人がつくった知識や技術を学習して覚えて使っているんですから、理性能力は原理的にはパクリなんだ。そのパクった知識や技術が役に立たなくなって、どうしようもない状態になって、だけど何とかしないと、と思って頑張っていると、初めて命に潜在する新しい力が湧いてくる。これが気づき、知恵、潜在能力の顕現と言って、そのことによって我々は今自分の持っている力でなんともならない問題を乗り越えられる人生が始まるわけですね。命から湧いてくる気づき、知恵、潜在能力というのは、まさに俺の命から湧いてきたもので、誰のものでもない俺のものだ。そこから俺の力で生きる人生が始まるんですよ。理性で生きる内はまだ借り物なんだ。本当の俺の力じゃないんだ。本当の俺の力というのは、命から湧いてきたものだけ。本当の命から湧いてきた俺の力というのは、今自分が持っている理性能力でなんともならん状態に立ち入って、逃げないで挑戦して何とかしようとすると、ようやく命に潜在する能力が湧いてくるという順番がくる。そのようにして、俺の力で生きるという独特の個性、能力を持った人間になれる、人生が始まる。そういう段階に入るんですね。それが本当の自己実現なんだ。生まれながらに自分に与えられる潜在能力を引っ張り出してくる。気づき、知恵が湧いてくる…それこそまさに本当の力。そこから俺の力で生きる、俺の人生、誰も真似のできない生き方が始まって、存在感が光り始めるわけです。そういう生き方を激動・激変の時代には覚えていかないといけない。過去の人間がつくったものはどれだけ知っていても、それでは歴史はつくれません。自分が歴史をつくる、この時代を一歩前に進めることをしようと思ったら、俺の命から湧いてくるものが大事なんです。そのためには、今自分の持っている力でなんともならんという問題に挑戦しなければならない。そのことによって自分の命に潜在する、まだ現実には、社会にはない力が湧いてきて、問題を乗り越えさせてくれて、そして一歩前に進めるという仕事ができるという状態になるわけですね。**

**そういう問題から逃げないで、問題に挑戦していく生き方を本当に、確実に自分のものにしたいと思ったら、何が大事なのか。確かに問題は辛いし、苦しいけど、問題には答えがあるんですよ。答えのない問題は出てこないんだということをちゃんと知らんといかん。どんな問題でもどんな悩みでも必ず答えはあるんだ。答えのない問題、答えのない悩みはないんだ。だからやり方としては、答えが出るまでやめない。成功するまでやめない。うまくいくまでやめない、諦めないということが唯一人間が成功と幸せを手に入れる生き方なんだ。どんな問題も答えがあるんだから、答えが出るまで諦めたらいかん。ということをできるかどうかなんですよ。結局、成功した人はうまくいくまでやめなかった人なんだ。**

**ではなぜ問題には答えがあるんだと言えるのか。そんなことが言えるのか。根拠は何なのか。問題や悩みというのは自分で求めていくものではなくて、求めずしてやってくるものなんだ。本当は自分にとっては嫌なものなんだ。問題や悩みは自分で探し求めるものではなくて、問題や悩みは求めずしてやってくるもの。つまりは、人知を超えた天の計らいなんだ。先ほど申し上げたように、自分を成長させるために天が与えるものなんだ。それはどういうことなのかと言ったら、命は母なる宇宙がつくったものですよ。その命の進化した形が人間なんだ。人間という命も自分でつくったものではない、つくられた命の形を与えられて、生きているんだ。我々は与えられた命をいただいて生きている。その命を進化させるために、成長させるために、母なる宇宙は苦しい問題を与える。なぜ、母なる宇宙は自分が生んだ人間に苦しい問題を与えるのか。それは、苦しい問題を与えないと、命は進化しないからなんだ。**

**母なる宇宙は、命を進化させるために環境の激変という問題を与え続けてきた。地球ができてそこに生物が誕生して、生物を進化させていくために宇宙は何をしたか、母なる宇宙がつくった子である生物に環境の激変という、とんでもない問題を与える。なぜか、環境が激変しなかったならば命は進化しないのだから。ガラパゴス諸島の生物たちは、生きた化石と言われて、周りを海に囲まれてるからあんまり環境は変化しない。環境は変化しないから命は進化しなくて、何万年前と同じ命の形をそのまんま東と申しましょうか、さんまのまんまでずっと引きずって、現在も生きている。環境が変化しないと、問題が与えられないと命は成長・発展・進化しないで、そのまま停滞する。だけども、母なる宇宙は命を成長させるために、何回となく環境の激変といううっかりしたら全生物が絶滅するかも知らんと思われるような、そういう過酷な問題を命に与え続けてきた。そのことによって、命は進化してきたんだ。だから環境の激変という問題も実は母なる宇宙が、自分が産んだ子なる生物を進化させるために与える愛ゆえの試練だと言わなければならない。環境の激変すら生物を進化させるために母がその命に与える愛の試練なんだ。それが生命の進化、生命が成長する基本原理であります。だから自分の身に降りかかる問題や悩みも人知を超えた天の計らい、母なる宇宙が自分が産んだ子どもである“俺”を成長させるために、母なる宇宙が母の愛を持って自分に与えてくれるもの、それが問題であり悩みであると考えなければなりません。問題は、自分を成長させるために母なる宇宙が自分に与えた愛ゆえの試練だ。自分が望んでないものが与えられるから、人間は苦しいんですよね。それは宇宙の側からしたら、その成長を望んで命に与えるものが問題であるということができる。**

**答えというのは先程申し上げたように、命から湧いてくる。気づき、知恵として命から湧いてきて、その問題を乗り越えていくのが答えです。すなわち答えというのは、外からくるのではなく、命から湧いてくるもの。では、それはなんなのか。それは、生まれながらに母なる宇宙から与えられている潜在能力。潜在能力とは遺伝子のことなんです。遺伝子というのは能力が物質化したもの。ですから、生まれながらに人間に与えられている潜在能力が命から湧いてきて、そして問題を乗り越えて人間は成長していくんだ。すなわち出てくる答えというのは、生まれながらに人間に与えられている遺伝子なんだ。どういうことなのかと言ったら、問題も宇宙から与えられる。答えも生まれながらに問題が出てくる以前から、命に生まれながらに宇宙が与えられているんだ。そして出てくる問題は、生まれながらに与えられている潜在能力、答えを引っ張り出すため出てくるんだ。だから、問題というのはその答えを引っ張り出すために出てくるんだから、問題が出てくる以前から答えはあるということ。だから、答えのない問題はない、ということに命はなっているんですよ。**

**人類が衰退して最終的に滅びるまでに出てくる全ての問題、それを乗り越えるための答えは、生まれながらに全て人間に与えられているんですよ。自分だけの問題だけではなくて、人類が絶滅するまでに人類が体験するであろう、すべての問題の答えが、もう宇宙によって生まれながらに命に与えられている。それが人間なんだ。だから我々は問題には答えがある。問題はその潜在能力=答えを引っ張り出すために出てくるんだから、もう答えはあることは決まってるんだから、答えが出てくるまで諦めたらいかん。答えはあるんだと思って問題に立ち向かっていかなければならないんだ。その気持ちがちゃんと定着すれば、案外と早く答えは出てくるんですよ。答えが出てくるかも知らん、ひょっとしたダメかも…と思ったらなかなか答えは出てこない。答えは出てくる、あるんだと思って諦めなければ、簡単にではないけど、案外に早く答えが出てきて、問題を乗り越えることになるんですよ。これが信じることの意味です。信じれば全てのことがスピーディーに解決する。疑ったらなかなかうまくいかない、そこに信じるという信仰の価値がある。我々は命を信じて、宇宙を信じて、問題に挑戦していかないといけない。どんな問題にも答えがある。答えと言ってもいろんなレベルの答えがありますから、一番いい答えがポっと出てくるということにならないかもしれませんが、諦めないで頑張っていたら、必ず問題を乗り越えられる答えが出てくる。倒産した会社でも、再建屋が再建してしまうのですから。答えのない問題はないんですよ。**

**我々は宇宙によって与えられた命を信じないといけない。宇宙の愛を信じないといけない。母なる宇宙は、愛を持って我々に問題や悩みを与えてくれる。それが俺を成長させてくれるんだ。だけども、人間は不完全ですから自分の力には限りがあります。ひとりの力でなんとかしなければと思うと、これは現実的に荷重、荷が重い。そこで考えないといけないのは、昔から言われている「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があるんですよ。自分ひとりの力でなんともならん問題は、あと二人の力を借りたらいいんだ。そしたら必ず文殊の知恵、仏の知恵、神仏の知恵が湧いてくる。つまり、「三人寄れば文殊の知恵」。では、なぜ三人なのか。それは生きた現実を正しく使おうと思ったら、俺だけの判断では主観的で偏っているんですよ。また相手の判断だけでも偏っている。また第三者の目で見ただけでも偏っている。生きた現実を本当にちゃんと正確に掴もうと思ったら、自分の判断と相手の判断と第三者の判断、この三つの判断を統合してガッチャマンして、結びつけると初めて生きた現実が正確に掴めるという構造に社会はなっているんですよ。これが社会構造が三次元という意味なんですよ。社会というのは、三つの違った目を統合しないと、本当の姿・本当の現実は掴めないという構造になっている。だから一人称二人称三人称という構造で言語も成り立ち、また社会構造もそういう形で成り立っているんですよ。だからどうしても自分ひとりの力でいかんという場合は、その問題を乗り越えるために必要なあと二人の人を探し出してきて、そして二人の人に協力してもらって、三人でその問題を乗り越えていく。そういう生き方を覚える必要がある。**

**その問題を乗り越えるためにその力を持っているあと二人を探し出してくるのも自分の力ですから。それは助けてもらったというか、自分の力で乗り越えたと言えるんですよ。必要な二人を探してくる努力も自分の努力ですから。「三人寄れば文殊の知恵」なんだ。自分ひとりの力でおぼつかなければ、あと二人の助けを借りていい。これが社会構造というものが持っている、人間が不完全だということに対応する方法論。会社の問題なんかでも、自分でダメな場合はあと二人の友達・仲間に相談にのってもらって、知恵を貸してもらって、そして乗り越えていく。そういうパートナーシップ、力を合わせて乗り越えていく生き方を覚えなければならない。会社はそういう組織になっている。皆の力を合わせて乗り越えていくのが会社ですから。そのためにたくさんの人間がい**

**てくれる。いろんな能力を持った人間がいる。もっともっと我々は助けてもらって生きることをしなければならない。助けてもらっていい。助けてもらわないと、本当の現実には対応できないんだ。まずは自分で努力しなければならないけれど、どうしようもなければ、あと二人の人間の助けを借りて、その問題を乗り越えていく。その生き方を覚えないと、不完全な人間は現実には勝てません。自分ひとりの力では現実に負けてしまう。とにかく、問題から逃げてはいけない。逃げないで答えが出るまで頑張ろうと思ったら、知っていなければならないことは、どんな問題や悩みにも答えはある。この事実をちゃんと抑えなくてはいけない。答えがあるんだから、答えが出てくるまで諦めたらいかん。うまくいくまでやめないという努力の継続が、人生の成功を掴む原理です。だから、逃げたらいかんのですよ。逃げないという気構えで人生に向かっていかないと、人間の人生には成功も幸せもないんですよ。**

**非常に実業上、大事なこれは原理ですから、ぜひ忘れないで常に心に置いて仕事をしてもらいたいと思うんですね。問題の出てこない道は堕落への道だ。問題の出てこない道を求めてはならない。出てきたときこそチャンスだ。問題を避けて通ろうと思ったら、それは堕落への道だ。だけど大事なことは問題のない道なんてないということですよ。どんな道を歩いても必ず問題は出てくるんだ。どこにだって問題はあるんだ。問題のない道を求めていって、この道は問題はないと思っても、それは問題があるのに見えてないということ。これは一番危ない状態なんだ。だから失敗するんだ。失敗するよりも成長できないんだ。成長できないということは、時代が動いてるから会社も人間も堕落するんだ。付いて行けなくなってしまう。出てくる問題を乗り越えることを通してしか、時代の流れと共に生きることはできない。時代と共に生きようと思ったら、その時代から出てくる問題を乗り越え続ける努力をすることが時代と共に生きることであって、問題のない道を求めていって、問題がないという風に思ったら、それは時代の流れから取り残されてしまう。確実に時代遅れの会社になり人間になって、使い物にならなくなってしまう。常に問題を乗り越えて、新しいものをつくり出していくことをする以外に時代の要請に応えて、時代と共に生き延びていく企業にはなれません。**

**そこで最後に求められるものが、創造力なんですよ。どうしたら一体命からクリエイティブな力を引っ張り出して、そして逞しく問題や悩みを乗り越えて、歴史をつくっていくか。そのために我々に求められるのは創造力。それを持った人間になるためには、どうするか。そのための方法論があるわけですけど、創造力をつくる。第一番目は、創造的なクリエイティブな仕事とぶつかるためには、現実への違和感というものが大事になります。現実への違和感という感性の実感が、創造的な仕事を教えてくれるチャンス。現実への違和感とは、なんかここのところ便利にならないだろうか、納得できないな、ぴったりこないなというのが違和感。これも感性の実感。感性が感じ始めて、理性が考え始めて、答えを出すわけです。問題を感じるのは感性だ。答えを出すのは理性だ。現実への違和感という感性の実感はなんなのか。それはなんかここのところ便利にならないだろうか、というのは「君こそそれを便利にするためにこの時代に生まれてきた。それが君の使命なんだ。それが君の仕事なんだ」ということを自分に教えてくれているという現象なんですよ。現実への違和感という感性の実感という問題意識は、出生への本懐を遂げる。「何故に俺はこの時代に生まれてきたのか。俺の使命、俺の仕事はなんなのか」ということを教えてくれるという現象なんですよ。多くの人が現実への違和感、「なんかちょっと納得できないな」「なんかちょっとおかしいな」と思いながらも、自分でやらないでいってしまう。ものすごく原理的には残念な、もったいないことなんですよね。本当は、「君こそまさにそこのところを君が納得できるところまで変えて**

**いく、その仕事することが君がこの時代に生まれてきた理由なんだよ」と教えてくれている。自分の使命を教えてくれている現象をついついうっかり捨ててしまって、そして大した仕事ができないような状態で一生が終わってしまうという、平凡な人生で終わってしまう人が多いんですよ。創造力を持った人間になりたいと思ったら、自分が仕事をしながら、あるいは自分が生活しながら、ふっと湧いてくる現実への違和感という感性の実感を大事にする必要がある。「なんかちょっと納得できんな」…それこそまさにそこのところをもうちょっと納得できるものにするために生まれた人間なんだ。そのために君はこの時代に送り出されたんだ。それをすることが君の仕事なんだ、使命なんだ。この時代に君がいたという命の刻印を歴史に刻んで死んでいける人間になれるんだ。それこそまさに君の歴史をつくる仕事なんだ、とささやきかけてくれる。現実への違和感というのは、天啓の一瞬、天の啓示。**

**自分がやってる仕事の中で、なんかここのところ便利にならないだろうか、というのは同業者なら皆が思っている現象なんだ。だけど、なかなか「俺がやろう」と思う人がいない。時間がないとか忙しいとか言って、自分でやらないで「誰かがやるさ」と放って置いてしまう。今自分がプロとしてやっている仕事で出てくる現実への違和感には関わっていって、そして自分が納得するまで問題に関わって、乗り越えていけば、たちまちその人は同業者間のトップに立てる。それほどの価値のある仕事を現実への違和感は与えてくれる。もっともっと全社員が、自分が仕事をしているときに出てくる違和感、問題意識というものを大事にして、それをシェアし合って、皆で考えていく組織にしたらものすごく会社は活力を持って発展し始めます。皆が問題意識を皆で共有し、全体・組織でそれを解決していく。そういう形に持っていったら、逞しい創造力のある企業になっていくことができます。とにかく、現実への違和感というものを大事にすることを仕事上、考えていかなければなりません。**

**これまで、なんで現実への違和感を感じたことのある人間ならば、その問題を必ずなんとかできると言えるのか。現実への違和感を感じるとはどういうことなのかと言うと、自分の持っている潜在能力が現実に存在するものよりも成長していってしまっていないと、現実に存在するものに「なんかここのところ便利にならないだろうか」とは思わない。自分はわかっていなくても、自分の持っている潜在能力が成長していると現実に存在するものに対して「なんかここのところ便利にならないだろうか」という感情が出てくる。現実に存在するものとぴったり一致していたら、これで良いと満足する。また、現実に存在するものよりも遅れていたり、劣っていたら人間は感謝・感動する。しかし、感動も満足もしない、「なんとかならんか」と感じることは、すでに自分の中で潜在能力が現実に存在するものの水準よりも遥かに成長してしまっているから。だから、そう思っている人間が真剣になんとかしようと思ったら、確実に自分が納得できるところまでは、現実を動かせる。歴史をつくれるということです。それを現実への違和感という感性の実感は、証明してくれているということ。だから、やるっきゃない。現実への違和感を感じたことのある人間ならば、それを自分でなんとかしようと思ってやる。そうしたらその人は、ことの大小を問わず、「これは俺のやった仕事だ」となる。この時代にいたという命の刻印を歴史に刻んで死んでいける。それだけの価値のある仕事をさせてくれるわけです。これが創造力を実践的に具体的に自分のものにする方法です。これをやり始めたら、やたらに問題や違和感を感じ始めますよ。本当に忙しくてたまらんくらいの問題が湧いてきますよ。その中でも度々湧いてくる違和感を自分の使命と考えて、取り組んでいけば良いわけです。違和感なんて山程ありますよ。いくらでも創造のチャンスはある。いくらでもこの時代に名をとどめていく仕事はいっぱいある。問題が自分に使命を**

**与えてくれる。現実の社会にある問題が自分に仕事を与えてくれる。問題こそ志を与えてくれる現象なんですよ。**

**もうひとつ創造力をつくる上で大事なことは、常識“で”考えていては何も変わりません。創造力をつくるには、常識“を”考えることをセントバーナードなんです。常識で考えるのではなく、常識を考えることをクセにしてもらいたい。常識“で”考えるではなく、常識“を”考える。常識を考えるとは、「これはこうするものだよ」と言われたら、例えなんの疑いが無くてもそこに疑問を持ち、「本当にこのままで良いのか？」と問うてみる。どんなに確かそうに見えることでも一度は「本当にそうなのか？」「このままで良いのか」と言ってみる必要があります。問うてみると、それはこのままで良いわけがないですから、ではどうしたら良いかを考える。そこで「このままで良いのか」と言えば、「このままで良いわけはないよな」となって、固定観念・先入観念にとらわれない自分ができていく。固定観念・先入観念にとらわれている場合は創造はできない。創造しようと思っても固定観念・先入観念を使ってしまっている。本当に創造しようと思うと、固定観念・先入観念にとらわれない意識を持たないと、原理的変革という創造はできません。固定観念・先入観念にとらわれないで何かできる自分をつくっていこうと思ったら、この方法しかない。常識を考える。どんなものでも「これはこうするものだよ」と言われたら、例えなんの疑いが無くてもそこに疑問を持ち、「本当にこのままで良いのか？」と問うてみる。あまりそんなことばかり言っていると、「変なやつ、天の邪鬼」と言われる可能性もあるので、あまりそんなことばかりではいけませんけど、50%くらいは常識に従って、あとの50%は変革をつくり出すために常識を考えるということをやってみる。そういう両面が必要ですね。**

**先ほど申し上げたように、今から100年前は明治維新でした。そこから100年経つと、あらゆるものががら～っと変わってしまった。それから生まれてきた人間が全部変えたんだ。今、百科事典に書かれていることは、今の時代における真理。だけど、30年経てば50%は全面的に書き換えが必要になる。あとの30%は部分的な修正が必要。30年経ってもそのまんま東、さんまのまんまで載せておいて良いことは、20%もない。今学問的に真理だと言われていることも、30年経てば嘘になってしまう。どんなに確かそうなことでも一度は「本当にそうなのか？」と問うてみる価値は充分にある。そういう作業が歴史をつくる、時代を動かすということになってくるわけですから。常識で考えるのではなく、常識を考えるときを持つ習慣もつくってもらいたいです。**

**とにかく今は原理的変革の時代ですから、今自分の身の回りにあるものは全部変えなければならない。変えないかんというよりも、変わる。30年、50年、100年という歩みを考えたら全部変わる。今あるものはそのままではない。誰がそれをやるかの問題。建築のデザインでも機能でも、また基礎部分の技術なんかでも日進月歩で変わっていくし、その進歩によって全く考えられない家の構造ができてくる可能性がある。激しく変化、新しい未来をつくるという作業に希望を持って、意味を持って、ワクワクしながらまだ見ぬ未来をつくる仕事に関わっていくことが大事です。それがプロの仕事なんだ。現実の消費者の要望に応えるだけでは、振り回され、非主体的な行為となってしまう。しかし、プロの誇りというのはまだ消費者も見ない未来を表現して見せて、「こういうことになりますよ」「こんなこともできますよ」と言って消費者に教えて、欲求・意識をプロの立場で導いていく仕事が誇りになります。そういう意味で実業の世界でその仕事のプロとして働く限りは、消費者の水準を超えてさらに素晴らしい未来を拓いて見せる。そこにプロの価値と誇りがあります。そういう意味でも常に想像力を逞しく掻き立てながら、常識を考え現実への違和**

**感に挑戦していって、歴史を一歩でも前に進める仕事の仕方をしていく必要があると思います。**

**とにかく、今日の激動・激変の時代は激しく変われよという変化が求められています。そういう時代の要請に応えながら、我々は自分の生き方を考えていく必要があると思います。年頭にあたり、ぜひこの変化をつくり出す、歴史をつくる仕事に関心興味を持って、日常の仕事に関わってもらえたら有り難いと思います。そして、アサヒグローバルという会社を世界が目標とするような水準にし、誇り高い会社にするために全社員が協力し、お互いが教え合い、学び合いながら努力してもらいたいと思います。今日はどうもありがとうございました。**